

アンドレア・チェツリ氏「翻訳における愛」講演アンケート

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大原, 志麻 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024903">https://doi.org/10.14945/00024903</a>

# アンドレア・チェッリ氏「翻訳における愛」 講演アンケート

大 原 志 麻

2017年1月から7月末まで、コネチカット大学中世研究センターで地中海研究をされているアンドレア・チェッリ准教授の静岡大学での受け入れ教員となる機会に恵まれた。特にこちらが専門としている中近世のスペインとイスラーム文化の交流のあり方については、多くの示唆を頂き、その該博な知識に驚かされるばかりであった。地中海研究はラテン語、アラビア語、俗ラテン語など多くの言語でコミュニケーションが交わされる場をテーマとしていることから、翻訳文化研究会の趣旨に合わせて「翻訳」についての講演をお願いしたところご快諾頂き、7月28日に「翻訳における愛」というタイトルでお話をうかがうことになった。講演は英語で行われたが、山内功一郎先生というこの上ない通訳と花方寿行先生の司会のお陰で円滑に進められ、その後の議論も大いに盛り上がった。お三方にはこの場を借りて謝意を申し上げたい。

講演には学生を中心に100名を超える来場者があり、質疑応答の時間はあったものの、とても時間内には収まらない沢山の意見・質問がその後のアンケートを通して寄せられたので、ここではそれらをまとめて紹介したい。マルチリンガルなチェッリ氏に対しては、日本語のみならず英語、イタリア語、スペイン語でも質問が寄せられていた。なお当初は本誌にチェッリ氏からの回答も掲載する予定だったが、アメリカに帰国後氏が多忙を極めたため、残念ながらここでは質問と意見のみをまとめることとする。



## 1. アンドレア・チェッリ氏への質問

講演の中で引用されたラテン語の格言「本の運命は読者の腕前にかかっている」が印象深かったようで、翻訳の忠実性に関する質問が多く出た。イスラームの恋愛論のヨーロッパ諸言語への翻訳という異なる宗教間の翻訳について扱っていたこともあり、あまり意識的な信仰を持たない日本人読者の解釈が「合っている」のか「間違っている」のかという議論はあるのか、作者と読者の間に解釈の相違が生まれることについてどう考えるのか、という質問があった。また、日本人の独特の宗教観を念頭に、宗教関連の専門用語や、それぞれの信仰における「愛」の捉え方をどう訳したらいいのか、日本人が寺社に行くのは明確な仏教への信仰心からではなく、仏教受容後一般化した一種の習慣によることが多いが、このような行動とその前提となる経緯を翻訳でうまく表現できるのかという疑問もあった。また、キリスト教思想を含む文献が日本語訳された時、その日本語自体は本質的なものを含んでいるかもしれないが、最終的に日本人にキリストの教えや愛が何か十全に伝わるとは思えない。共通しているように思える「愛」という言葉をとってもヨーロッパと日本でズレが生じるが、ヨーロッパの世界観を共有していない日本人がこうした言葉を本質的に理解することは可能なのか、それとも翻訳において細部は必ず失われるものなのかという質問もあった。異なる宗教間だけではなく、例えば女性である紫式部と男性であるイブン＝ハズムを同性または異性の翻訳家が訳す場合のように、作者および翻訳家の性別や性別に伴う恋愛観の相違が翻訳に与える影響はあるのかといった、ジェンダーと翻訳の関係にも質問が及んだ。

翻訳における自民族（文化）中心主義については、ヨーロッパ中心主義などイデオロギーが反映される翻訳は適切といえるのか、異なる文化圏、例えばヨーロッパと日本の間の翻訳となると、それぞれの国の出身者二人以上で翻訳を練ることで譲歩や近似値を見つけるのかなど、翻訳をより「正確」にするためにどうすべきかをめぐる質問もあった。翻訳は訳者によって同じ言語でもどのくらい違いがでるものなのか、またその違いはどのようなものなのか、翻訳者の主観や翻訳時の時代背景はどれくらい影響を及ぼすのかについての質問が多く投げかけられた。

「翻訳は不可能なミッションである」というチェッリ氏が投げかけた根本的な問題をめぐっては、翻訳の「良し悪し」の判断基準にはどのようなものがあるのか、「素晴らしい」翻訳はあるのか、あるとしたらどこで判断するのか、完璧

な翻訳というものは存在しないように思えるが、その中でも翻訳が成功したかどうかの判断はどのようにするのかといった評価基準をめぐる質問や、翻訳者によって同じ作品でもニュアンスが違ってくることがあるが、それが翻訳者自身の物語の解釈の違いからくる場合、そもそも翻訳が「よい」「悪い」と区別されることは適切なことなのか、あるいは読者による受け取り方は自由なのだから、どの翻訳も尊重されるべきであるという考え方もできるのか、また翻訳者にとってのよい翻訳と読者にとってのよい翻訳が異なることはあるのかといった評価基準の相対性をめぐるものなど、多数の質問があった。

オリジナルに忠実な訳と意識、そしてそれに伴う誤訳や歪曲の危険性や原文と訳文の対照については、翻訳する際には何を優先し、重要視すべきなのか、翻訳を行う際には原作に忠実に訳すか、よりわかりやすく伝えるために自国の言語に落とし込んで意識するかの判断が肝要になるが、どこに一番重点を置くべきなのか、原作に忠実な翻訳作品が評価に値する作品だとは必ずしも言えないのかどうかといった原則的な問題について、あるいは原作の文化に則して訳すべきなのか、翻訳に用いられる言語を用いている文化に受け入れられることを重視するのか、どちらも取り入れるのか、あるいは異なる時代や文化間で生じる概念の微妙な差異を、本文中に注釈を入れずに訳し出すことは可能なのかといった具体的な作業に関する質問が寄せられた。

ひとつひとつの言葉は長い時の経過を通して産み出され、底の深い精神的構造に依拠している。例えば「[love]がヨーロッパ文化によって構成されたものであり、その意味が極めて複雑に階層化された伝統の中で規定されていることを見過ごしている」ことから、単語の意味を普遍的であると考えことは欺瞞であるという、言語レベルの移転の問題と歴史的言語についてのチェリ氏の説明にも質問が集中した。アラブ、ヨーロッパ、日本における宮廷恋愛を比較した際like, loveの度合いについてどのように表現し分けるのか、あるいは中国の漢字はもともと表意文字で、簡体字になる前は日本語と同様「心」を含むものとしての「愛」という字を用いていたが、英語のloveにはどんな意味が含まれているか、また諸言語の愛に含まれている意味と異なる箇所は何なのかといった本講演のテーマである愛をめぐる質問も多かった。またアラビア語をスペイン語に訳するときの複雑さについて具体例を知りたいという要望もあった。また、翻訳において自分の国にはない概念や慣習、制度などの翻訳にはどのように対応するのか、文化の違いにより翻訳できないのはどのような場合かという質問もあった。

翻訳者は「普遍的な現実があり、各々の言語がそれを表現するための異なる言葉をそなえていると信じてしまうこと」に敢然と抵抗しなければならないという発言については、異なる文化・考え方を持つ他の地域の言語に、どのようにしてその国の言葉が持つオリジナルの概念を再現するのかという問いがあった。

「翻訳者の仕事は、単に原文の言葉に対応する言葉や熟語を見つけるのみではありません」という翻訳元と翻訳先の言語と文化を複雑に捉える必要性を伝えた言葉については、日本語に訳された外国作品を読むとき、それは翻訳者の解釈が入ったものを読んでいることになるのかという疑問や、別の言語から翻訳されたものや、書かれてから長い時間が経過している本を読むとき、文化的距離の大きさや言語の感覚のずれからほとんど正しい意味が読み取れていないと感じる時があるという懐疑的な意見もあった。こうした翻訳者の体験する試練の中で、一番大きな試練は何かという質問もあった。チェッリ氏個人に対しての、翻訳にあたり一番困ったことは何か、翻訳で一番大切なことは何か、チェッリ氏にとってのloveや翻訳とは何かといった質問や、大変ながらも翻訳をどうしてしていこうと思ったのはなぜか、もしじぶんで『鳩の頸飾り』を訳すとしたら、どこに注意するのか、また同作品の中でどのようなところに時の隔たりを感じるかといった具体的な質問も多かった。

『鳩の頸飾り』の背景をはじめ、文献の歴史的背景や書かれた国の内情について考慮すべきであるということに同意しつつ、スペインにおけるアラブ文化ということでは、現在のスペインにおいてイスラーム起源の習慣で残って居るものはあるのか、コルドバのカテドラル＝モスクはカトリックとイスラーム教が共存している証左として理解しても問題はないのかと質問を投げかけるものもあれば、チェッリ氏が歴史的背景を知っておくべきだと最も強く感じたのは『鳩の頸飾り』のどの部分なのかという質問や、西洋とイスラーム文明が不可分だった時代という作品の背景や影響のネットワークに作品を位置づけて解釈する読みと、系譜調査を退けて作家固有の声に集中するというオルテガの意見のどちらをチェッリ氏は支持するのかという質問もあった。

時間の都合上、テキストの内容をじっくり味わい比較する時間がなかったため、具体的に翻訳からどのような文化の違いを読み取ることができるのか具体例を教えてほしいという要望が複数あった。同時代の同じく恋愛を扱った作品でありながら、『源氏物語』という同時代の日本においても人気を博していた作品と、発表当時関心を持たれなかった『鳩の頸飾り』の違いについて、宮廷の

内情の書かれ方が異なるのか、読み手の興味関心の対象が異なるのかなど、具体的な比較を聞いたかったようである。

ウマイヤ朝という背景に馴染みがなく、予備知識がないため、なぜ愛についてのエッセイ集の題目が『鳩の頸飾り』となるのかなど単純に確認を求めるものや、アラブとヨーロッパは歴史・文化・宗教的な関係をもっており、それゆえ翻訳がよりよいものとなっているようだが、その関係が与える影響について具体的に知りたいという意見も寄せられた。

母語はイタリア語で、講演は英語でなされ、私とはスペイン語で話し、今野先生とはフランス語で話され、アラビア語圏の大学での留学経験が豊富で、娘とは日本語で話すという、チェリ氏がマルチリンガルであることに関連しての質問もあり、そんなにたくさんの言語を話すことができるようになる秘訣は何か、多くの言語を学ぶ動機は、外国作品を読むためか、実用性ゆえか、仕事で必要だからか、多くの人と話すためかなど質問が集中したが、自分もそうなりたいという感想もあった。チェリ氏が日本語を学んでいることから、日本語は難しい言語といわれているが、他の言語から日本語に翻訳する際の難しさはあるのか、ヨーロッパ言語と日本語で価値観がかけ離れていて翻訳するのが難しいことは何か、日本語原文と英語訳で差異が際立つのは、一人称の主語として用いる言葉が日本語に多い点ではないかという意見もあった。

その他の質問としては、翻訳は原作から他言語へ移されることで、無限の可能性とダイナミズムを持つと読んだことがあるが、この考え方についてどう思うか。また、翻訳作業が創作の随伴現象とみなされがちな点を踏まえて、翻訳は創作そのものに比べて劣っていると考えられがちだが、翻訳の最大の魅力はなにかという大きな質問もあった。

## 2. アンドレア・チェリ氏からの問いかけに対して

講演の最後にチェリ氏から、「言語の性質そのものが人間の概念の移ろいやすい性質の証拠であることを承知しながら、それでも我々は忠実にテキストを訳すという作業にあえて取り組むことがはたしてできるのでしょうか？」<sup>1</sup>という問いかけがあり、それについては以下のような答えが寄せられた。

地域ごとに言語が異なる以上、翻訳を介さないわけにはいかない。しかし言

---

<sup>1</sup> How can we then ever take on the task of truthfully translating a text, when we know that the nature of language itself bears witness of an ephemeral nature of human concepts? Is Ortega's warning throwing us into the despair of relativism? I would like to hear your opinion on this.

語は過去を知る一つの方法に過ぎないので、翻訳に問題がある場合、それを認識して補っていく、もしくはとりあえずキー概念を伝える必要がある。言葉は変わり続けるので、翻訳する時々に合わせて訳を模索するべきだ。

語彙の等価性や類似性について問題はあるとはいえ、たとえ文化が異なることで原作に忠実ではなくなってもそのことを受容し、また相互の文化の共通点と相違点を認識し、共通している部分を生かして翻訳するのが好ましい。異なる部分については、その言葉の文化や背景について注釈を入れていけばいい。原文の本質から離れて行ってしまうことに気を配りながら、どこまでそのギャップを埋めていくかを認識するべきだ。

とにかく完全に二つの言語文化を理解するしかないということで、翻訳の際には言語だけではなく文化を知っていなければより正しい訳はできない。膨大な時間をかけて二つの国の伝統や歴史を調べ、不自然にならないように翻訳するべきだという意見もあった。

「愛」という言葉の意味が違うのであれば、アラビア語の「愛」を外来語として取り入れる。エキゾティズム風の処理を行うことで解決する。他国の言葉をそのまま外来語として取り入れ、自国の文化に根付かせることは異文化理解では大事である。時間がかかっても外来語として理解していくしかないのではないだろうか。異文化に存在する事物は観念が受容国にそれまで存在しない場合、対応すべき単語が存在していない時、どう概念を移し替えるのか。カセット効果<sup>2</sup>のように、当座意味がよく通らないまま使っていくことから始めるしかない。カタカナことばや翻訳漢字を受容可能としてきた奈良時代以前から続く日本語の構造を生かして、外来語として取り入れていけばよいという答えは複数あった。

翻訳者の創造性に任せてしまえばよいという意見も多く、そもそも完全なまたは中立的な訳を目指す必要はなく、翻訳に訳者の背景や思想、生い立ちなどがにじみ出ているのも好きである。翻訳を自分なりの解釈だけでするのではなく、話し合ったり、他人の意見を聞いたりすることが大切ではないか。それをしなければ、「よい」「悪い」の境界が判然としないため、相対主義であるしかない。翻訳は時代ごとに移り変わる言語を用いており、また異文化における微妙なニュアンスを伝えなければならないので困難である。有名な話に夏目漱石が“I love you”を「月が綺麗ですね」と訳したというのがあるが、これも日本な

---

<sup>2</sup> フランス語の宝石箱を意味する cassette がカセット・テープに転じる。

りの、そして漱石なりの訳として正解／間違いはないと思った。また辞書的な単語としてとらえず、柔軟な翻訳をしていく。辞書に書いてある以外の答えもあり、答えが無いのであれば、自分なりの解釈をしていいのではないか。翻訳者の過失も独自のものである。言葉の歴史的意味は考えずに、その時代の文脈の内に生きている限りで問題にする。我々が外国の文章を読むとき、その文章が書かれた場所を完全に追体験はできない。しかしそれも自分たちの文化との違いを感じることで楽しむことができるのではないだろうか。異文化相互の関係は歴史的に誤解、不審、しばしば拒否という要素から成り立っており、それを乗り越える手段が翻訳である。翻訳のネットワークによって個々の特殊な民族文化を結び付け、また特殊性を理解するべきだなど、翻訳の不可能性を受け入れなおかつ翻訳活動を続けようとする意見が多数あった。

### 3. 感想

プラトンの唱えた「世界自体に先立って普遍概念がある」という考え方にヨーロッパの学校で教育された翻訳者が親しんでいる、という話への感想が多く、翻訳者だけではなく、読者側もこのことを念頭に置いたうえで、ヨーロッパの翻訳作品を読むべきだと思う、「当然だと考えてしまうことに疑いを持つ」ことを参考にしたいという感想があった。Loveという単語一つでも複雑に階層化されている点に翻訳の難しさを感じ、外国作品を読むときには翻訳の問題を意識して読もうと思うきっかけとなったというものもあった。

ある言語で描かれたものを異なる言語に訳すだけでは、言語や文化の違いによって大きな隔たりが生じるという翻訳の難しさを感じた、言語以外に時代性や社会的文化的背景を考慮しつつ行う作者の意図に沿った翻訳が重要ではないかと思った、など言葉を外国語に移すだけでは翻訳にならないということに認識を新たにしたいという感想も多かった。

異なる空間の空気感という、かたちのないものを表現することの難しさを感じた。自国の言語ですら難しく、同じ文化の中でも人によってとらえ方が異なることがある。その文化にある言葉の概念を可能な限り正しく理解しようとし、翻訳する姿勢、愛=Loveと簡単に訳してしまうが、本当に同じ意味なのかよく考える姿勢を身に付けようと思う。翻訳ものは読みづらいが、翻訳と読みやすさの関係が気になったといった翻訳の「読みやすさ」を疑おうという感想も寄せられた。

翻訳について考えることが日本文化を振り返るきっかけにもなり、日本の古



典を訳する際にも、趣を伝えることは直訳では伝わらない。その作品を深く理解し、また幅広い理解がないとできない。日本の俳句や短歌、源氏物語の外国語訳は、どれもどこか原作とは違うものになっていたり、リズムが破壊されていたり、本来の意味とは違う解釈になっているものが多い。言語の違いが作品に込められた作者の意図を正しく伝えることはできないことは残念だが、それでも国境を越えて評価される作品というものは、本当に素晴らしいと思う。またイスラームの宗教観が強く出ている作品が、ヨーロッパや日本など異なる宗教の国でも読まれ、評価されるというのは面白いといった、日本との関係に結びつけた感想もある。

英語での講演だったため難しくあまり理解できなかったが、英語をさらに勉強しようというモチベーションになった。またイスラーム＝スペインやウマイヤ朝の文学のスペイン語訳についての話だったため、時々出てくるスペイン語が端々なんとなく理解できて嬉しく、スペイン語も英語ももっと勉強して内容を理解できるようになればいいなと思ったなどという感想もあり、英語や初修外国語に取り組んでいく上でもよい刺激にもなったようである。

取り留めなくなりがちな質問や意見、感想ではあったが、それだけ学生たちの関心が様々な方向に広がっていったということであろう。チェッリ氏には改めて感謝の意を表すると共に、今後のご活躍をお祈りし、またいつの日か日本・静岡大学にいらしていただく機会が持てることを期待して、本稿を締めくくりたい。